「わがまち紹介」活動の感想

今年の干支の龍が祭られている神社 瀧尾神社へ新年の参拝

1月18日、あいにくの小雨の日でしたが、東福寺駅から少し歩いた場所に、さほど広くない敷地にもかかわらず立派な本殿等がありました。

神社の拝殿の天井に全長８ｍもの龍の彫刻

拝殿の天井には、全長８メートルもの木彫りの巨大な龍が据えられていて、拝殿に上がり龍を間近に鑑賞して来ました。

拝殿の彫刻の龍
龍頭の下が
“パワースポット”

目を見つけたとたん身体がすくむ思いがする程に圧倒されました。

龍のあまりにも迫力のある出来に、「夜な夜な川へ水を飲みに行っている、恐ろしく眠れない」と、当時近所から噂が広がり、神社は拝殿の天井に金網を設置して、人々の気持ちをしずめたとの言い伝えが残っているそうです。

神社の幣殿・拝所・回廊には
動物や霊獣の彫刻の装飾

本殿正面にも十二支の動物等の彫物がされていて、動物達をさがし当てながら立派な作品を拝見させて頂いて来ました。

記：明見容子

編集部後記

令和6年の干支は「辰年」。素晴らしい龍が見れるスポットとして、辰年にちなみ、例年なら8日迄を月末の1月31日まで「特別昇殿期間」が設けられ、拝殿に昇って間近で龍の彫刻を鑑賞できました。

令和6年1月18日は、小雨がパラつき傘をさしての散策でした。

東福寺駅へ約束の時間より早めに着いたので、改札口での「マン・ウォッチング」も楽しいものです。

我々と同年配の人達のグループが仲間の到着を楽しそうに話しながら待っている。さすが一月の京都の観光客は、老いも若きも外国人も多いなぁと眺めていました。

江戸時代の伏見街道と
東福寺の絵図

駅を離れ、伏見街道の何やら懐かしい雰囲気に子供の頃の思い出を綴り合わせながら少し歩くと、赤い鳥居と提灯が目立つ瀧尾神社に着きました。

本殿は平安京以前からの水を司る龍神を祀った、絢爛豪華な貴船神社奥院旧殿を江戸時代に移築されたのだそうです。

どうやって運んだのだろうか、川を使って船で運んだのかなぁ・・・。

天井の龍は手に金の玉
「宝珠」を持っていた

拝殿には巨大で立体的な龍が金色の大きな玉を抱えている彫物が、私たちを見下ろしています。

こんな龍の彫物は初めて拝見させて頂きました。

神社の拝所・幣殿・東西
廊の両面の見事な彫刻

又、金箔が施されて美しい正殿の正面や回廊に十二支の彫物が生き生きとした姿で、目をかがやかせて私の方を見ていました。令和6年辰年のとても素敵な宝物を頂いた思いです。

誰か知り合いに自慢し、又頂いた宝物のおすそ分けをしたいです。

記：田中　容子

瀧尾神社と大丸創業者 下村彦右衛門正との関係

今の大丸を創業した下村彦右衛門正啓はわずか19歳で家業を継ぎ、宝永3年（1706年）に伏見で古着の行商を始めました。

正啓は毎日毎日まだ暗いうちに伏見を出発して京都へ向かい、もう暗くなってから仕入れた沢山の品を背負って伏見へと戻りました。

瀧尾神社の説明版
神社と大丸創設者の
関係も明記

京都と伏見を結ぶ伏見街道脇にある瀧尾神社では、雨の日も風の日も往路も復路も必ず足を止めて参拝し、商売繁盛と家運隆盛を祈っていました。のちに大丸という商号としたのも、瀧尾神社付近で昼寝をしていたときに思いついたとも言われています。享保2年(1717年)についに正啓は伏見の京町八丁目の呉服商の大文字屋を開くことができました。今の大丸百貨店のルーツです。

やがて名古屋、大坂、京都、江戸へも次々と進出し、事業に成功した。

正啓は、元文1738年～1745年にかけて瀧尾神社の修復を行いました。彼の死後も下村家の瀧尾神社への信仰は続き、1836年に今の本殿が完成しました。

瀧尾神社は、「大丸の宮」「大丸稲荷」とも言われています。

記：大岡　成一

編集部からのお願い

会報の原稿お願い！！

会報「VG槻輪だより」は、全て会員の原稿から編集・構成しています。

会員から頂いた「会の活動予定や報告」・「会員のやりたい事」・「会員の趣味の紹介」等々を会員によって編集・校正し・印刷している手づくりの作品です。

会報は、各会員に手渡しで配布しています。